

街場の就活論 vol. 9

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ
団 遊

グローバル人材って、いったい、なあに？

「グローバル人材」という言葉がブームだ。企業の「グローバル化」とともに、この言葉も市民権を得てきた印象がある。

企業の「グローバル化」は、つまり世界市場で勝負できる企業に成長することを指すのだと思う。もう少し砕いて言うと、円以外の売り上げをいかに上げるかだ。決算発表の際に、総売り上げに対し海外売上比がどれほどだ、という情報もセットで提供されることが増えた。

同じ文脈で考えると、グローバル人材とは世界市場で勝負できる人材、ということになる。ところが「グローバル人材とは、どのような人か？」という評価は、少なくとも HR（ヒューマン・リソース＝人材業界）の世界では定まっていない印象がある。その結果「とりあえず英語ができること」が最初の足切りになり、授業を英語で実施するようになりベラル・アーツ系の大学が、新卒採用では人気を獲得したりする。

しかし、もちろん英語ができるだけのバカもたくさんいる。一方で、彼・彼女に英語力が備われば、これこそグローバル人材と呼ばれるのだろう、と

いう人材もたくさん知っている。

現在、世界市場で活躍する日本のビジネスマンをイメージしたときに、果たしてその中の何人がハナから英語を操れたのだろうか？ 英語ができることを意味がないとは言わないが、過大に評価するのもまた、日本的だと思う。劣等感の持ち方に、お国柄が出ている。

先日、とある人材会社が主宰するシンポジウムに参加した。その際に、このテーマが議題に上がり「グローバル人材をうまく輩出できない（とされる）ボトルネックは何か？」が話し合われた。その結論は「育成し、輩出すべき HR 担当者がグローバル人材ではないからではないか」と結ばれた。

世界市場で勝負できる人材は、世界市場で勝負できる人材にしか育てられない。考えてみれば、そりゃそうかとも思う。

「あなたの会社が本当にグローバル人材を育てたいと思うのであれば、まずはあなた自身には育成は無理だという現状理解から始めましょう。その先に、無理なりの何かが見つかる可能性が生まれ

まれるからです」と、登壇者のひとは話していた。なんとも自虐的なまとめではあるが、的を得ていると思う。

確かに、そんな風に考える人が増えたら、「TOIEC 点以上」とか「ビジネス英語検定 級以上歓迎」的な、横並びのグローバル人材育成戦略にも、また違った風が吹くのかもかもしれない。

お金持ちに、なりたい！

私が約半年の期間で開催する大学の授業の最終目標は、自分はどんなことを大切に社会に出ていくか、その方針を漠然と決めるということだ。人生目標までは立てられなくても、こんな風になるのは嫌だな、と思うことはできる。嫌も、積み重ねると、なんとなく好きが見えてくるもので、いろいろなアプローチ方法で、自分の将来を考える楽しみを伝えようとしている。

そんな中「おっ、来たなっ！」と思うのが「お金持ちになりたい」を唯一絶対の目標に掲げる学生だ。ただし、日本人学生では、このような目標に掲げる学生は皆無。こう語るのは、必ず留学生だ。もちろん、日本人学生の中にも思っている子はいらるだろうが、口には出さない。そのように、日本社会が育てているのだろう。

「お金持ちになりたい」というモチベーションを否定する気は、もちろんない。しかし、せっかく出会った学生の人生目標が「お金持ち」というのも、なんだか寂しいなあと思う。だから、お金は結果に必ずついてくるものだ、ということを繰り返し伝える。しかし、なかなか響かない。出身国の影響も少なからずあると思う。そしてこれは、人はなぜ働くのか、という根本的自問に辿り着く。

この自問に関して、最近「なるほど」と思ったのが、サッカー選手の長友佑都選手が書いた本『日本男児』の中の一節だった。彼は文字通りの成り上がり選手で、地方のユースチームから大学を経てJリーグ、海外の弱小チーム、そして名門インテル・ミラノへと上り詰めた。

彼は著書の中で、名門チームとそうでないチームの違いを「一流クラブのサッカー選手は、それぞれにボランティア活動に熱心だったり、基金を設立したりしている」と書いた。さらに「自分がビッククラブに所属する選手であり続ける理由を、自らの手で作り上げている印象がある。そのプライドが、ほかに負けない原動力となっているようだ」と記していた。

人は働き始めると、まずは自分のために頑張るのだと思う。向上心を持ち、目標に向かう。これを仮にファーストステップとする。それを乗り越えると、セカンドステップは守るべき人の為や、これまで育ててきてくれた人々に感謝を表すために頑張るのではないだろうか。そして、多くの人は、このモチベーションで仕事を全うし、生涯を終えるのではないかと思う。

しかし、一部の人は、セカンドステップでは頑張り切れぬ状況になることがある。つまり、これ以上頑張らなくても、守るべき人を守ることはでき、また、周囲から「良くやった」と言われてしまうような状況。自分の内面から湧き出るものでは頑張る必然性を見いだせない領域だ。

思えばビル・ゲイツ氏をはじめ、経済界の大物は、すべからず慈善をモチベーションとしている。孫さんが東日本大震災に 100 億円を寄付したことも、ずいぶんと話題になった。誰もがこのような大金持ちにはなれないが「暮らしていくには十分」という状況に辿り着く人は少なくない。けれどもやはり人は本能的に働きたい・働くべきだと思うだろう。楽をするために働いてきたわけではないからだ。

そんなときに、「顔も知らぬだけのため」がモチベーションになるのではないだろうか。世界一のサッカー選手・メッシは「自分は自分を見て勇気づけられる子どもたちのために頑張り続けたいといけぬ。僕のコンディションとは関係なく、彼らの中には、待たないの状況にいる子がたくさんいることを忘れてはならない」と、何かのインタビューで語っていた。

「お金持ちが目標です」と語る彼らに、仕事はそう浅いものではなく、もっと深く面白いものだと伝えたいと思うのであるが、これがどうして、なかなか難しい。

文 / だん・あそぶ

アソブロック株式会社、有限会社 ea 代表、ホンブロック発行人、立命館アジア太平洋大学非常勤講師